平成 25 年 11 月 14 日(木)

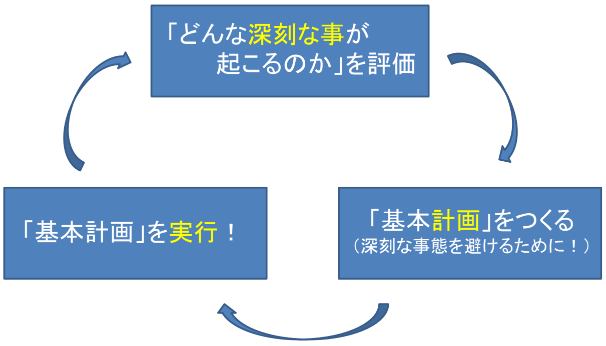
災害対策特別委員会　　参考資料

京都大学大学院教授　藤井聡

①古典より（葉隠）

「覚の士，不覚の士という事軍学に沙汰有り．覚の士というは，事に逢ふて仕覚えるばかりにてはなし．**前方に，それぞれの仕様を吟味し置きて，その時に出合ひ，仕果するをいふ**．されば，万事前方に極め置くが覚の士なり．不覚の士というは，その時に至っては，たとえ間に合わせても，これは時の仕合わせなり．前方の穿鑿(せんさく)せぬは，不覚の士と申すとなり．」 ... 「必死の観念，一日しきりなるべし．**毎朝身心をしずめ，弓，鉄砲，槍，立ち先にて，すたすたになり，大浪に討ち取られ，大火の中に飛び入り，雷電にうちひしがれ，大地震にてゆりこまれ，数千丈のほきに飛び込み，病死，頓死等の死期の心を観念し，**毎朝懈怠(けたい)無く死しておくべし．」　　　　**→これこそが、災害対策の要諦**

②政府は「**国家的なあらゆる災害**」に対する「**リスク・マネジメント**を回す」（＝国家的な危機管理を行う）**責務**を持つべきである。



→これを通してはじめて、あらゆる災害に対して「**国家が強靭化**」される

（国家　＝　nation state　＝ 国土、国民、主権）

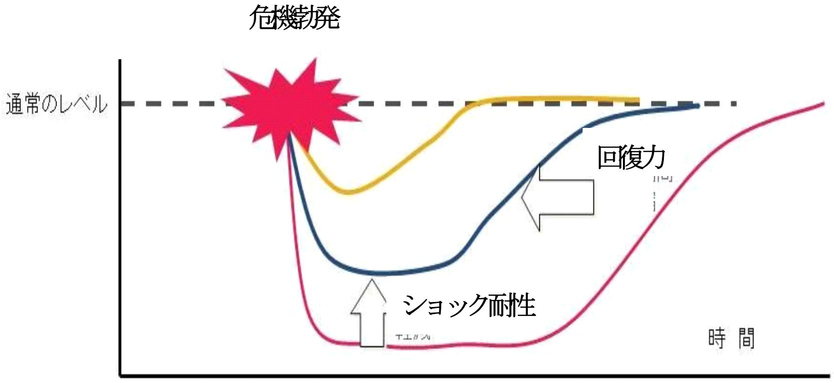
③国家危機管理／国家的リスクマネジメントでは、「あらゆる国家的災害」を考えるべきである。

巨大**地震**、**世界恐慌**の危機（ギリシャ、中国、米国財政の壁等）、

消費税増税ショック、エネルギー危機、テロの危機　等

④「強靭化」では「対ショック性」（狭義の**防災・減災力**）**に加えて**

「回復力」（**事後の成長力**）　**を見据えるべし**



強靭性＝レジリエンスのイメージ図

※災害の恐怖は、Ｘデーにおける激甚被害だけではない。

Ｘデー後、長期間悲惨な状況が続くことこそが、恐怖の本質

→これがしばしば、見過ごされがちであるが、決して忘れてはならない。

平成 25 年 11 月 14 日(木)

※つまり、強靭化は、「何があっても成長できる力」を身に付けることであって、したがって、それは、「リスクを見据えた成長戦略」と同義である。

⑤「強靭化」のためには、全省庁・組織の「体質改善」が不可欠。
つまり、全平常業務が「平時」と共に「災害のリスク」を見据えたものとなっているべき。 （※　平時業務に、有事対策を「**溶かし込んで行く**」ことが必要）

- 各システムの**二重化**　（運輸システム、サプライチェイン等）
- 各組織間の平常での**連携**　（地域連携、業界内連携、地域間連携等）
- 各システムの**自律・分散化**　（産業、通信、国土の各システム　等）
- 「**有事転用**」の事前想定　（大型小売店→防災倉庫、物流センター→防災拠点）

↓そのためにも。。。。

全てを市場に委ねることを避け、市場・政治・社会の適切な調和を探ることが不可欠。

⑥なお、有事対応のための強靭化（連携、二重化、分散化等）は、

平時の「経済成長力」　（連携によるシステム効率化、遊休資産の活用　等）
平時の「社会活力」　（交流促進、まちづくり・福祉の進展　等）

に大きく貢献する。

つまり、災害に強い社会とは、

「災害のためだけの特別事業を別途行っているだけの社会」では無い。

そうした特別事業を**一定水準進める**と共に、

「**あらゆる事業が、災害を見据えたものに調整されていく社会**」である。

つまり、**「社会風土・文化」の中に、災害対応が織り込まれている社会**。

これこそが、「強靭化」と呼ばれる取り組みの要諦なのである。

以上